

教会 イエスの共同体

1. 神のみ旨を知ること

・真の教会革新

- ・今日多くのクリスチャンが、教会をどのように革新するかということを真剣考えている。革新を求める声じたいは決して新しいものではない。旧約時代では預言者が、新約時代では使徒たちが革新を求めた。
- ・それは教会にいのちがあり、成長する可能性があるしるしだ。教会が生き続けていけるかどうかは、教会が悔い改めて、新たにされることを願っているかどうかにかかっている。そうでなければ、イエス・キリストの教会として存在することはできない。
- ・教会の真の革新は神のみ旨を知りたいという切実な願いからおこってくる。神に従う道をより深く体験したいという願いだ。主を知りたい、主に仕えたいというひたすらな願いからでてくる、革新を求めるすべての声を、神の民に属する者として喜んで受け入れるべきである。しかしすべてが真実の革新とはいえない。
- ・革新が真実なものであるかどうかを判別するには、それが歴史をどうみているかを吟味する必要がある。なぜなら革新運動はしばしば歴史に対して否定的な態度をとったり、また必要なのはただ聖書に帰り、聖書を読むことだけだと考えるから。
- ・したがって神の民は、そもそも自分たちを生み出すことになった根源的なできごとを離れては、本質的な革新を期待することはできない。歴史的な視野は革新のための基準を与えてくれるし、また、われわれ自身のありのままの姿をみることができるようしてくれる。

□ポイント

- ・教会は悔い改めて、新たにされることを願っているか。
- ・神のみ旨を知りたいという切実な願いがあるか。（イエスの生涯と教え）
- ・イエスが人としてお生まれになった歴史をどう見ているか。

・イエス・キリストが基準

- ・神の民の歴史の中で真の革新にまで導かれた運動がいくつかあった。16世紀のアナバプテストは、その基準を新約聖書の教会のなかに見出した。彼らは初代教会の単なる模倣のなかに革新を求めたのではなく、拠り所となるべき基準はなんであったかを尋ね求めて、それを教会の中心に置こうとした。
- ・あらゆる時代の教会にとって、その基準とはイエス・キリストであった。キリストが主であるということは、実際どのような形をとって表現されるだろうか。この質問は重要である。というのは教会の革新がとるべき形と大いに関連があるからだ。
- ・革新される教会の未来において、いつそう明確になるのは、キリストこそが主であるということであるが、その基準もまたキリストである。キリストはどんなお方であるかは、受肉、すなわち歴史において神が人となりたもうたというできごとを通してのみ知ることができる。受肉において、神

1. 神のみ旨を知ること

は最もご自身の本質を啓示してくださった。（ヘブル1：1～3）

- ・イエス・キリストが教会の宣教をはじめられた。それゆえ教会のありかたと宣教はいつもイエスを基準にして、あるいは新約聖書にもとずいて判断されなければならない。新約聖書はイエスを証する唯一の権威ある言葉である。
- ・イエスの受肉がどのような形をとったか、苦難を受けながらも最期まで神に従順であられたキリストが主なのだから、しもべとして仕えたもうたそのみ足のあとに、われらもまた従って行くのである。

□ポイント

- ・キリストが主であるとはどのような形をとったのか。（神が人となりたもうた）
- ・イエス・キリストが教会の宣教をはじめられた。
（教会のありかたと宣教のありかたはイエス・キリストを基準とする）
- ・神の民の歴史における根元的な革新
 - ・神の民（イスラエル民族）にとって、真の革新とは神への反逆から回心して、イスラエルの出発点であり、またその規範となったできごとに帰ることであった。（例えばエジプト脱出）
 - ・預言者たちはシナイ山においてイスラエルが神から特別な使命を与えられた過去のできごとを指摘することによって、神の民としての真の革新へと招いた。（ホセ11：1～4）
 - ・パリサイ人が離婚の問題でイエスを罠にかけようとしたとき、イエスは基準となるべき権威、すなわち本来的な神のみこころという光に照らして裁くべきことをしめた。（マコ10：1～9）
 - ・パウロは、神が人間を義とされるのに律法の働きよりも信仰が第一であることを教えようとしたが、そのとき彼もまた、モーセの時代をさかのぼってアブラハムを例に見るよう訴えた。
 - ・革新あるいは改革とは、イエスのみこころに従って倫理的な判断を下すということである。われわれはイエスの生涯を、聖書の証する受肉のできごとを通して知ることができる。世に来られたキリストの生き方を基準とするような、そういった革新を求めるとでないならば、教会は正しい道からそれる危険を犯すことになるだろう。

□ポイント

- ・キリストの生き方を基準とするような革新が革新である。
- ・聖書を正しく解釈すること
 - ・教会がどういう姿に革新されるべきかを決定するのは、イエスのみこころとイエスの教えと生涯であるとするならば、新約聖書と真剣に取り組む姿勢が根本的に重要なことになる。
 - ・ところが聖書に対する態度と解釈において大きく違いが出てきているのが実情である。16世紀の宗教改革の時代、聖書を解釈する4つの方法が明確にされた。

1. 信仰の法則

聖書解釈は教会が過去において行ってきた解釈からできるだけ離れないようにすべきであるという考え方である。伝統的な教会の信仰と実践とが、聖書をどう読むべきかを決定する。

1. 神のみ旨を知ること

それは伝統的な信仰の枠内にとどまらざるをえない。そしてイエスのみこころ、教え、生涯に合致するかどうかは状況によってかわる。

2. 愛の法則

簡単に実行できそうな解釈だけを採用することである。つまり弱い信徒にたいする寛容や忍耐を優先し、道徳的に厳しい決断をやわらげようとする法則である。このような考えが教会全体に適用される理由は、弱い人たちに愛を欠くわざであると考えられたからである。しかしこのことは、聖書を読む者がイエスの弟子としてどう生きるかという問題にもなり、教会をどう理解するかにも関係する問題である。

3. パウロの法則

- ・パウロの言葉から示唆をうけるもので、「預言をする者の場合にも、ふたりか三人かが語り、ほかの者はそれを吟味すべきである。」（Iコリント14：29）コリントの手紙の文脈から分かることはクリスチャン共同体が集会をするときに、そのなかで聖書解釈がおこなわれるべきであるということである。この考え方において基本的な事、新しいことは教会という交わりが、神のみ旨を最もよく解釈する場であるということであり、すべての信徒が「キリストのからだ」の完全な一員として聖書解釈の特権を行使するのである。
- ・不従順によっておこる問題の解決を求めてクリスチャンが集まるときはいつでも、その場に聖霊が働いてくださり聖書の意味をはっきりさせてくださる。
- ・パウロの法則は教会の歴史的伝統を無視するのではなく、ただ伝統に権威を置くことを拒否するのである。こうして聖書を読み、解釈する権利と義務は、共に集まる兄弟の交わりに与えられる。

4. キリストの法則

- ・教会が共に聖書を解釈することが根本的に重要であると教えるもう一つの箇所は伝統的にキリストの法則とよばれている。（マタイ18：15～20）
- ・教会がキリストに従順な倫理的な判断を下すことができるように、神のみ旨を知ろうとして集まるならば、そのときキリストの霊がともにいてくださるといことが約束されている。（マタイ16：19、18：15～20ヨハネ20：22、23）
- ・ここには二つの重要な事柄を教えている。

イ) 主に従う道

- ・教会のなかで拘束力をもつような倫理上の決断をする権威が教会に与えられたのはマタイ16章が示すようにペテロの告白である。これの特別に注目すべきことは、イエスを主と告白する共同体だけが、神のみ旨を解釈して、それにふさわしい倫理的判断を下すことができるように、神から権威をあたえられたということである。
- ・このことはキリスト教における知識とはどのようなものかを理解する上に重要な意味をもつ。それは聖書をともに読み、解釈する弟子たちの共同体が、イエスに従おうとしているかどうか鍵になる。

1. 神のみ旨を知ること

ロ) み旨を求める兄弟関係

- ・ 神への不従順のために共同体のなかに問題がおこることがある。そのようなときにこそ、聖書が解釈されるべきであることをキリストの法則は教える。“つなぐこと・解くこと”のプロセスを通して神のみ旨を知ることができる。それは、イエスに従い和解を体験するように導かれるからである。
 - ・ 新約聖書によればイエスが“教会”という言葉を用いたのは二度しかない。(マタイ 16:18、18:17) その両方とも、神のみ旨を求める(倫理的決断を求める)教会の働きとの関連において用いられた。そのことは“神のみ旨を求める倫理的判断”がいかに重要であるかを示している。
 - ・ 聖書を読み解釈することは教会の存在にとって基本的なことである。そこに教会は成立し、そして交わりのなかで彼らはキリストにある和解を互いに体験する。
- ・ 神のみ旨を新しく知ること
- ・ “信仰の法則”、“愛の法則”、“パウロの法則”、“キリストの法則”のこれら四つのうち、あとの二つの方法だけが新約聖書にあるがままに読む道を開き、その置かれた時代においてキリストへの忠実をどのように実践するかを示すことができた。
 - ・ 革新が本物であり、真に根本的なものであるためには、
 - ① 神と兄弟姉妹とのまえに心を開くこと。
 - ② 悔い改めをする用意ができていること。
 - ③ 犠牲を払ってもキリストの主権に従おうとすること、が求められる。
 - ・ 以下はこれから入る本題の問題意識(主題)である。
 1. 教会一分かち合う共同体
 - ・ 現代社会は自己主義、個人主義を特徴としているが、悲しむべき事実である。ところがそれはキリスト教会にまで入り込んでいる。
 - ・ 神が聖霊を通して与えて下さる交わりは、キリストの体なる教会のなかで具体的にどのような形をとるのか。
 2. 教会一赦し合う共同体
 - ・ 新約聖書の共同体は主への献身や倫理的な厳しさをその特徴としてもっていた。それはあきらかに我々の間に欠けたものである。
 - ・ どのようにすればキリストの弟子として、最も高い基準に達することができるように助け合えるのか。
 3. 教会一賜物の共同体
 - ・ 教会のなかに聖霊の力の真実なる現れを見出したい、それを体験したいという真剣な願いが我々のあいだにある。
 - ・ キリストが注いでくださるすべての賜物を、どのように受け取ることができるのか、またキリストの共同体としてどのように賜物を持ちいるべきか。

1. 神のみ旨を知ること

4. 教会—平和の共同体

- ・教会のありかたと使命について「霊的」な面と「社会的」な面をはっきり分けてしまう非聖書的な見方が広く行き渡っていることは悲しいことだ。
- ・イエス・キリストを主と告白する共同体が、イエス・キリストを通して与えられる平和の福音の全体的な姿を、誠実に、しかも具体的に表現することは可能なのか。

5. 教会—宣教の共同体

- ・イエスが彼の共同体に委ねられた使命、すなわち福音を宣べ伝えよという福音の本質はなんだろうか。
- ・我々の時代においてイエス・キリストの弟子を作るといふことは何を意味するのか。